



詩物語



〈下〉

鳴瀬羽迦

slight

I don't have the slightest idea.

『slight』

髪を乾かしながら 考えていた
昨日のこと 明日のこと

浮かぶ応えは どこか非現実的で

偽物だった 信じていた手を 離した
放たれたのは まだ迷う 自分の心だった

皐月を迎える夜に 巡らせる 想い どこへ
閉じた部屋は なんだか亜空間で

時を戻せるのなら 形ない時まで 還りたい
何も知りたくはない 怒りも 哀しみも

時空が瞬く 回帰してゆくよう
でも まだ詩う ほどけるまでは この心が

夜の窓を 開いて 月の光に 影を落す
淡くて 消えそうな 影を落とす

浮かぶ応えは どこか非現実的で

切り花はいつも哀しい仕草をみせる

『noctiluca』

生きるということは 喜びや哀しみの海を泳いで行くようで

海原の向こうに何があるのかは 解らないけど 尽きるまで

狡猾な人間に食まれる ココロの手足は痛むけれど 耐えて

波の旋律に鼓動を沿わせて 鳴り響く遠雷のように 委ねて

移り変わる光景の 音楽に浸りたいけど 求められるものは

シンクロナイズドスイミング 一瞬 遅れれば 泡と果てる

喜ぶことも 哀しむことも それは澱む入り江の 溜まり水

のようで 許されないままに次から次へと 層を重ねて行く

真夜中に 浮かぶ 一点となって この惑星の一点となって

天空に問う 時代を問う 生きる意味を問う 星降る海原に

淡すぎる光 イルミネーションに遮られ 届かない声 萤火

報われないのでしょうか 掠れた詩歌 この生命 この想い

Early Summer

風の音に聞き耳をたてる 雨をよむ

『Early Summer』

靴のひもを結んだ 踏み出そう 今を

5月の風は ほんのり汗ばむ身体を 流れる

どこまで歩いても みつからない 答えだけど

命ある限り 歩き続ける 地球と 回り続けよう

春を越えて 新緑が迎える 初夏の匂い

海が見える辺りまで 息が切れても 行こう

あらゆる記憶が モノクロームとなって

この鮮やかな世界に 埋もれ行くまで

命ある限り 想い続ける 幾重にも星を包むように

辛い季節よ 心の底で土に 変わって

新しい息吹を 新しい根となって 新緑を支えて

差し延べた手に 目映い光の 粒子を掴む

人の心を映すのか 空模様

『静謐』

雲が紫に染まるころ ふらりと散歩

風の渡る丘まで 街灯が点灯し始める

対岸のオレンジのライン 空の紫

風の音 髪を踊らせる

葉の生茂った桜の老木 ざわめく

でも心は 静かなのとても

皮膚一枚 隔てて

私という人間が この世界に存在している

瞳の窓から この世界をみつめる

限りある空間 心

体温が冷め 鼓動が止まるまで

風に 吹かれようか

やがて夜の闇に 包まれる

街灯に浮かぶ影に 息のあることを想う

帰ろう キミの待つ家へ

twilight

闇夜 想いは 未知の海に行く

『twilight』

窓の形の風景 暮れてゆくシルエット

閉じた部屋に 音は響かなくて

無音のまま 揺れる樹々の枝葉を 眼に映した

カーテン越し かすかな水色に 明日を想う

また 朝はやってきて

雲が流れる大空のした 大きく手を振って 歩くのを

疑うことなく 想い浮かべる

目覚めなくても 気づかないまま 夢に綴じて

陽のさす部屋に でも光は命に届かなくて

心に残る光景 暮れてゆくシルエット

『CLOTH』

誰か わたしをみつけてくれるでしょうか

このレイヤーに溶込んで

時代の風になびいて 口遊んでいる

あなたは 星の海をみつけましたか

たくさんの魂が泳いで

小さな球体から 命を芽吹いているの

昨日 スクランブル交差点で擦れ違った 誰か

ひとつのビルの同じフロアで み知らぬままに空気を共有する 人たち

それぞれの運命の軌跡が 時代を編むの

忘れてはいけないこと 忘れてしまう

だからいつも 一からやり直し

繰り返される模様が 時代に編み込まれてゆく

いつか 誰か みつけてくるのでしょうか

ドレスに仕立てられること待つばかりで

魂のクロスは 宇宙になびいているの

* * *

決められた時間の中で 踏むステップ
境界ギリギリまで可能性を求める
張り詰めたココロは スネアのように響いた
深奥の鼓動を信じよう

illu s o r y

Listening to this beautiful music, I feel as if I were in a trance.

『illu s o r y』

宙（そら）に　ひと粒の涙を落とした

始まりは　そんな感じ

キミをみつけるまで　旅を続けようと

そして時は　生み出される

夢をみよう　淡くて儚い

叶うことを　望み続けて

夢は　見続けるもの　だから夢のまま

キミはまだ　ここにはいない

私は計画をたてるべきですか

夢ではなく　目標として　達成するために

したたかなココロを　持って

この歌声は　どこから響いてくるのだろう

風の　流れのような

風に 身を任せているから 辿り着かない

でもそれでも いいのかもしれない

予期しない風景を 眼に映したいから

私として 夢のままに 叶うことを

ただ 思い描きながら

Color

空の青は私たちの脳が想像する色...

『Color』

あふれる色を 見るために

あふれる色の あることを

胸に染ませた 今ここに

記憶は 畳まれてゆく 過去へ と

いつか この頁を

誰か再び 開くのだろうか

鮮やかに 光が弾け

形 浮かび上がる この世界の

宇宙（そら）に 花火を見るように

空（くう）に 色を添える

必然なのだろうか 偶然なのだろうか

未知数なのだろうか 既知数なのだろうか

それでも 自分という感覚は

意味を ココロの内に見いだせる

たとえ 法則の内であっても

記憶は 織られてゆく 未来へ と

未来へ

灯よ できるなら まだ燃え続けて...

『未来へ』

人には越えられない時がある いつか その時はやって来る

キミごめんね 弱すぎるね私 言葉だけは与えられた時間を

越えて 私の知らない未来へ ねえ キミ 生まれ変わりを

信じてる？ もし そうなら 考えてごらん あなたは次に

あの国の 災禍の中に生まれるかも知れないってことを 今

できないことをするために 来世は用意されるものではなく

どこも関係ない地はないこと それを 教えて くれるもの

でも誤解しないで 私は 生まれ変わりがあるとは思わない

人の 一生は 一話完結だと そう 考える者なの 沢山の

後悔があるよ 取り戻せない 後悔があるよ そんな人生を

歩んできたけど 今は願うよ キミがキミの人生を謳歌する

ことを ただ そう願うよ 何ごとにも遠慮なく 生きてと

今を思うままに 生きてと 私には見えない 未来その先へ

an image

雷雨が過ぎ去り また夏空が現れて

『an image』

映像は見栄えする部分しか映さなかったり綺麗に編集されている

そう解り切っているのに人は憧れてしまうもの その映る世界に

思い出もいつか美化されていくのかな 目を閉じたくなる今をも

フレームの外側を他人事のように忘れられれば 少し楽になれる

太陽が眩しい 真夏の真昼 アスファルトの照り返し 目眩する

今朝TVで流れていたBGMがリフレインする 映像の世界みたい

ほんとうは情熱なんてないの 生まれた日からココロは冷めてる

何もののにも触れずに見つめていればよかったスクリーンのように

どうして手を伸ばしてしまったのかな ココロというのは苦しい

どうして触れてしまったのかな 体温はいやおうなしに醒ますよ

現実 is 過酷 その反動で夢を追う 繰り返し繰り返し 夢を追う

resign

空 優しい 水色

『resign』

空が優しい

痛んだ心がとけていくよう

キミはどこかで幸せに暮らしているのだろうか

月日ばかりが過ぎて

ときどき こんなふう泣くんだ

あの日と おなじ水色の空をみあげて

忙しさが 忘れさせていること

忙しさに 助けられているのか 逃げ込んでいるのか

軌道修正できないままに 離れてゆく

取り戻せない時間も

星の寿命に比べたら ほんの一瞬なのに

果てのない海のように

キミの乗った船はもう水平線の向こうに消えた

不器用すぎて泳げない私は 飛び込むことができなくて

今も この海岸線をいったりきたり

このまま砂に埋もれるんだろう

キミがどこかで幸せに暮らしてるなら それでいい

悪しく思われようとも

ほんとうの気持ちが伝わらなくても

キミがどこかで幸せに暮らしてるなら それでいい

density

勇気を纏って 弱い心だけど
勇気を纏って 歩いて行こう

『density』

キミの声を聴いたよ 名前を呼ぶ声

音のある世界 耳に響く 柔らかな音（おん）

大気を伝わって 不思議な密度

繰り返す呼吸 身体に取込まれる酸素は

あらゆる人の どんな想いを転写して 大気に戻るのだろう

キミが幸せであることばかり願う私の心は

きっと不安でいっぱいなのだろう

だから 願うのではなく そうあることを想うよ

小さな惑星なんだ 人と人が どんなに離れているように見えても

太陽辺りから観れば この星のすべては ひと粒

誰かの呼吸に取込まれる 酸素のひと粒のように

アンドロメダ辺りから観れば 見えない存在なのだろう

そして 心は宇宙（そら）のように膨らんだり 砂粒のように縮まったり

この身体に備わる 不思議な作用

音のある世界 心に響く 柔らかな音（おん）

キミに呼ばれて 目を覚ました

a solitary planet

週末 休日 疲れたカラダが求める 眠り

『a solitary planet』

夢をみたよ 星の生まれる 宇宙（そら）

最初の種は 忘れられた 記憶

パッケージされた世界という 惑星

その内に開いた 小窓

海岸線を走る どこまでも続く 群青

崩れ落ちる 波のしづき ま白

繰り返す光景に 押しつぶされそうな心は 孤独

想い焦れる 温もりある 腕（かいな）

Tuning Fork

ビジネスモードは私という殻を着た わたし

『Tuning Fork』

すこし曇り空の日曜日は 陽も優しくて

風には 秋の滑らかさもまざっている

生活の音と匂いが流れている 家並みはのどかで

この瞬間がリピートされ続けてもいいな と

時の狭間 まどろんでいたいから そんな気持ちになる

明日の扉を開けたくないのは なぜなのだろう

その向こうで手招きする 未来の自分は 見知らぬ他人みたい

ここにある ここまで歩いてきた この心を失いたくはない

人はどうして変わってしまうのだろうって思うこともあったけど

変わってしまったのは自分だったのかもしれない

胸に鳴る この微かな響きを忘れないように

心を形作る音の波は大気を伝わり そして雲を呼ぶ

森に降りてくる夜の匂い ひんやりした質感

『わーぶ』

月のきれいな 晩

雲が流れて 夜空を渡る

薄く虹色に染まるエッジ

みあげる わたし

疲れた足に 重力が絡みついて

繋ぎ止められているようだけど

心を雲に飛ばして

風のゆくままに 夜空を渡ろう

月のきれいな 晩

雲の船で 夜空の虹色を纏おう

透ける宇宙の海を 渡ろう

